

「沖縄での座り込み」

2015年12月12日

沖縄の辺野古で座り込みに参加してきた妻の友人の手紙が、興味深いので紹介したい。

「朝の辺野古行動にも参加し、座り込み、機動隊にごぼう抜きされました。たった30分でしたが、搬入する車を止めることができました。あの時ばかりは、太っていて重い自分が役に立ったと、嬉しかったです。200人くらいが座り込みました。700人来た時は、あらかじめ車が帰っていったそうです。辺野古には、往復1,000円の島ぐるみバスを利用したり、朝の行動の時は、4時半に起きて、6時着になるよう、連れていってもらいました。

参加している老若男女が皆、すがすがしく美しく、機動隊は、マスクやサングラスで、無表情というか、かわいそうな若者達だと思いました。東京から派遣されているので、地元の警察と違って、乱暴になっているそうです。1日せいぜい30分の仕事で、ごぼう抜きして、終わると超高級ホテルに引き上げていくそうで、莫大な経費を使っているそうです。

来年の宜野湾市長選の選挙事務所にも行き、カンパしてきましたよ。お茶とシークワサーを出してくれました。何がなんでも勝ってほしいです。」

辺野古では毎朝、1時間でも30分でも工事を遅らせようと、住民たちの座り込みが行われている。機動隊はそれを、命令通りにごぼう抜きしている。私も「ごぼう抜きされるために行きましょう」と誘われているが、そんなことでしか反対できないのが悲しい。

佐藤優氏の著作は本屋に山積みされている。職業作家になって10年、出版した本は100冊を超え、対談や共著を含めると200冊を軽く超えているという。今年の12月に『日本でテロが起こる日』を上梓している。佐藤氏は外交官としてインテリジェンスに関わり、世界をリアリスチックに捉えている。その中で「沖縄が日本の将来を握る — 民族問題と国家統合」と題して書いている。佐藤氏は保守的な論調の媒体での執筆が多く、保守系に色分けされているがと前置きし、「私は今の政府が沖縄に対してやっていることはひどいと思う」と書き出している。明らかに「構造化された差別」があり、ハンドリングを間違えると、今後、日本国家の統合が崩れる可能性がある。沖縄の人々が、沖縄人か日本人かを無意識のうちに、あるいは意識的に選択せざるを得なくなる「民族問題」が生じてくる。翁長雄志・沖縄県知事が一番恐れていることは、沖縄が日本から分離してしまうことである。沖縄には「独立論」の分離傾向が潜在的にある。分離しないためには、今のような強圧的な辺野古新基地建設を阻止しなければならない。佐藤氏は、沖縄問題は「民族問題」であるとしばしば指摘し、「私は、日本と沖縄が一緒にとどまっていたほしいと強く思っています」と書いて、国家統合を維持する手立てを考えるべきであると訴えている。

在日米軍基地の割合は、サンフランシスコ平和条約の時は、沖縄の基地が10%、日本の基地が90%だった。沖縄復帰の時は50%対50%だった。現在は1対3の不平等な比率になっている。岐阜県や山梨県にあった海兵隊を普天間に移したのである。それらの基地は全て、銃とブルドーザーで確保したものである。佐藤氏は、日本の都道府県は47あるが、47人のクラスで考えてみよう、下記のような例えを書いている。みんなが嫌がる便所掃除を、多数決で「佐藤君の席が便所に一番近いから、佐藤君が便所掃除をするのがいい」と決めた。佐藤君がいくら異議を唱えても、多数決は変わらない。

私も沖縄のジャーナリストたちと座り込みを続けている人々の生の声を聴いた。沖縄の諸々の選挙で辺野古新基地反対の民意が明らかに表されたことに誇りを持っているが、その民意が本土に伝わっていかない沖縄の焦燥感を痛いように感じた。